



## 九 再生

---

「やれ。やるんだ」

上司から二つのドローンに命令が下された。

「あたしたちを」

「殺すのか」

奈保子と俊彦は、ママとパパだった二つのドローンを凝視する。二人の体はより一層密着し、一体化になろうと堅く抱き合う。

その姿を何の感情もなくカメラを向けるママとパパのドローン。二人とも、二つとも動かない。時間が永遠に止まったかのようだ。その静寂の世界に聞こえるか聞こえないかぐらいの微かな音が時間差で鳴った。

「カチ」

「カチ」

何の変哲もない、スイッチが押されたような音だった。

だが、その瞬間、奈保子の姿はつま先から膝、大腿部、腰、腹、胸と順番に見えなくなっていた。

「あたしが、あたしが、消えていく・・・」

どうすることもできずに、ただ、呆然と大きく目を開くだけの奈保子。

その側で

「奈保子さん！」

消えてゆく奈保子をこの世界にとどめようと強く抱きしめようとする俊彦だが、その自らの手の指先も、腕も見えなくなっていく。

「ああ・・・」

「ああ・・・」

二人の驚きの言葉さえも消えていく。

とうとう奈保子は顔だけになってしまった。

「さよなら、ママ。さよなら、俊彦さん」

奈保子は、最後に残った右目でママと俊彦を確認すると、上唇しかない口で最後の言葉を発した。

「な・ほ・こ・さ・ん」

奈保子の姿が消えると、後を追う様に俊彦の体と言葉も消えた。

二人が立っていた場所には、マッチ箱程度の小さな黄色い箱が二つ並んで落ちていた。

ママドローンとパパドローンはアームを伸ばし、その箱をそれぞれ震えながら掴む。自分たちが育てたはずの人間が小さな箱となっている。あの体はどこに消えたのだ。あの幼稚園や小学校の入学式の際に、握り締めた手はどこにいったのだ。それとも、最初からなかったのか。

思考が全く働かない。バグってしまっている。それなのに、子どもたちを消すことになったスイッチは何のためらいもなく押した。奈保子や俊彦を助けたかったはずなのに、どうすることもできず、自分の意志に反してスイッチを押したのだ。いや、スイッチを押したのは自分の意思だ。自分の体なのに、自分ではどうにもできない。一体、自分たちは何者なのだ。混乱が混乱を呼び、回線が不通となる。

ママドローンとパパドローンは箱を抱えたまま、なすすべもなく空中浮遊していた。

上司のドローンは部下たちのバグっている状況を見かねて、これを解除するために情報を与えた。その内容とは次のようなものだった。

箱の中には、奈保子と俊彦のDNA、つまり遺伝子のみが入っていた。奈保子や俊彦の顔や体は映像でしか過ぎなかった。その映像は膨大な人間の体形のデータからアトランダムに選ばれた

ものだ。そして、その顔や体形は、奈保子や俊彦の成長に合わせて違和感なく変更された。箱の中にいながら、映像だけは成長していたのだ。

何故、人間を箱の中に閉じ込め、映像だけの顔や体を与えたのか。それは、これまで人類は、人間同士の血を血で洗うような争いを繰り返し続けてきたし、人間が生きるためという大義名分で、牛や豚などの家畜を始め、マグロやカツオ、カニなどの魚介類を乱獲・殺害し続けてきた。また、だいこんやきゅうり、りんごやバナナなどの野菜や果物も、それらが血を流さないため、また、声を出さないため、生き物という感覚はなく、育成という名の下で、大量に生産し、摂取・処分してきた。また、食糧だけでなく、工業製品等の生産過程における廃棄物等も完全なる処分することなく、目の前から見えなくなればそれで全てが解決したかのように、垂れ流しや埋め立てをし続けてきた。

このままでは人類も、地球も滅亡してしまうと考えた英知の人々たちは、人類及び他の生物、そして地球の存続のために、人類が最小限のエネルギーで存続できるように、体自体をなくし、遺伝子だけの箱で生き続けることができるようにしたのだった。その過程においては、反対する人間たちを排斥・排除するため、多大なる血の粛清があった。

しかしながら、結果として、人類は効率的な生活を送れるようになり、他の生物にとっても、互いの生存競争は残ったものの、人類から駆逐される、滅亡させられるということはなくなった。

ただし、DNAだけの新たな人類が、箱の中だけで一生を終えることは、これまでの人類の歴史や文化を途絶えさせてしまうことになるとの判断から、体を持っていた時と同じような生活ができるように、箱に装置を組み込み、映像の顔や体を与えたのだった。もちろん、その小箱からは常に電波が発せられ、どこにしようが存在場所がわかるようになっている。

そのおかげで、DNAの小箱の中の人間でも、顔や体を持った仮想人間として生きることができた。我々も常に人間を管理することができた。だが、こうした事実は箱の中の人間は知らない。いや、知らせていない。全てが人類知能の下に管理され、顔や体を持った人間として記憶させられているのである。だから、映像同士の手が重なれば、実物の手がつながっていると認識しているのだ。女性が子供を産むことも、男性が精子を提供することも、実際には行われていない仮想現実であった。

これらを指示し、決定した英知の人々たちはもうこの世に存在していない。そのため、英知の人々にプログラミングされた人類知能が人類の種の保存・存続のためにこの社会を維持しているのであった。

「奈保子や俊彦、いやこの二つの黄色い箱はどうしましょうか」

情報を与えられたママドローンとパパドローンは納得したものの、次の行動が思いつかない。

「そのレモンか」

「レモン？」

ママドローンとパパドローンは同時に聞き返した。

「ああ。レモンだ」

「ガリリと噛んだら、酸っぱいレモンですか」

「そうだ。だが、我々も箱の中の人間たちも、もうレモンを齧ることはできないけれどな」

「どうして、レモンと呼ぶんですか」

二つのドローンの声が重なる。自分たちが長年育ててきた子どもをレモン扱いされて、上司に対して食って掛かってしまった。そんな二つのドローンに対して、上司は感情を変えることなく、平然と答える。

「レモンは皮が堅くて、表面上はどれもきれいに見えるけれど、中が腐っていても外からわからないものもある。まさに、今の人間たち、箱の中のDNAと同じだ。箱の中で生まれて、同じように成長するはずなのに、今回のように、社会の異分子になってしまう人間もいる。異分子程度で済めばよいが、社会を乱すようになる者もいる。レモンとはまさに、こうした壊れた、まがいもの人間のことを指すんだ」

その言葉を聞いて、二つのドローンは黙ってしまった。そのまがいもの、反逆分子をこれまで育ててきたのは自分たちだったからだ。子どもたちのことはわかっても、感情までは見抜けなかったのだ。いや、薄々は違和感を持っていたものの、反逆分子として育てていることを認めたくなかったのだ。それは自分の保身のためなのか？それとも、奈保子や俊彦の成長のためなのか？

「とにかく、そのレモンたちは、そのまま、洞窟の中に戻せばいい。他の箱、他のレモンたちと同じようにだ。そのうちに、DNAも老化して、生命を終える。もう二度と、人間の姿には戻れないのだからな。ただし、皮肉なことに、表面上は鮮やかな黄色のままだけどな」

上司の言葉が終わると、ママドローンとパパドローンは大事そうにその小さな箱を地面に置いた

。その側には、同じようなレモンたちが京都の鴨川の川べりに座る恋人たちのように並んでいた。

「私たちはこれから」

「何をすればいいんですか」

ママドローンとパパドローンは戸惑いながら、宙に浮いている。二つのドローンは人間を育てることが仕事だった。その対象者の人間はもういない。そうなれば、自分たちも必要なくなるということだ。まして、今回、奈保子にしろ、俊彦にしろ、社会を不安定にさせる異分子として処分されたのだ。その監督責任をとって処分されても仕方がないのだ。

それもまたいい。奈保子と俊彦がいない世界で生きていっても仕方がないし、どうせ逃げても、それこそスイッチ一つで、自分たちは動かなくなることを知っていたのだった。

ママドローンとパパドローンは上司の前でいかなる処分も受ける恭順の意を示した。

「今回の事件のように、人間は、我々人類知能では想定できないような思いもがけない行動をする。それについては、これまでも多くの事例を集めてきて、対応できるようにしてきたつもりだった。だが、残念なことに、こうした事件が起きてしまった。このような事件は二度と起こしてはならない。そのためにも、二人がどのような感情でこれまで生きてきたのか、情報が欲しい。その情報を分析して、次なる世代の人間を全うに育てることに役立たせなければならないのだ。我々も常に勉強が、想定外の実例が必要だ。研究材料として、二人の記憶を吸収してくれ」

互いにカメラで見合わすママドローンとパパドローン。

「記憶さえも奪えば、彼女たち、奈保子はそれこそ、生きる屍ではないですか」

ママドローン恐る恐る尋ねる。

「どちらにしろ、彼女たちは生きる屍だ。それよりも、記憶も失くしてしまった方が、今後の人生で、あれこれと悩まなくていいだろう。その方が幸せではないか。人は幸せのために生きていく生き物なんだ。我々人類知能はそれをサポートするのが役目だし、そうプログラミングされている」

「わかりました」

はむかってもどうせ体は上司の命令で動くだけだ。ママドローンとパパドローンは、土の上に置かれている黄色い小箱にアームを伸ばし、記憶という情報を吸収し始めた。情報の移送が100パーセントに達した時、二つの箱がピクッと動いたような気がした。

「完了しました」

パパドローンが上司に報告する。ママドローンは自分の体の中に奈保子が入ってきて、一体化しているような気がした。思わず、つぶやく。ナ・ホ・コ。

「御苦労。君たちには、また、新たに、子どもたちを育ててもらおう。そのためには、今までの記憶、情報が邪魔になるだろう。我々も、今回の事件を分析するためにも、人間とその人間を育てたドロンの感情等を分析する必要がある」

と、言うまもなく、大型ドローンが二つのドローンをアームで掴み、羽交い絞めにした。

「何を」

「するんですか」

ママドローンとパパドローンは強固なアームから逃れようとするものの、力の差は歴然としており、身動き一つもできない

「お前たちの情報を吸収する。生まれてくる人間の子どもたちと同様に、お前たちも生まれ変わってもらおう」

上司の命令で、巨大なアームが二つのドロンの頭脳に手を伸ばすと、素早く、頭脳から情報を吸収して、代わりに別の情報と入れ替えた。

「さあ、お前たち。病院に行って、次世代の子どもたちを育てるのだ」

上司の指示に、必要な情報を組みこまれ、生まれ変わったママドローンとパパドローンは、大きくうなずくと、新たな人間の成長を求めて病院の方へ飛び立った。

「あいつらを何故、許すんですか」

これまで一言もしゃべらなかつた部下のドローンが上司に尋ねる。

「これも全て織り込み済みだ。何年間に一度は、こうした異分子による、人間の言葉で言えば、恋の逃避行のような事件が起きる。人間が人間たる自由を求めて、こうした行動を取るのだ。それで、人類全体として、ストレスが発散でき、種として維持できるのだ。

これらの人類の行動も我々をプログラミングした英知の人々の知恵なのだ。こうした、自分の命や将来までも犠牲にするような理不尽な行動までは、人工知能をより発展させ、感情を持つことができたはずの我々人類知能においてもまだ想定できないのだ。そう。まだ、我々は不完全なのだ。だからこそ、多くの事例を集めて、ビッグデータ化し、あらゆることに対応できるように日々努力を積み重ねているのだ。

だが、いずれは、英知の人々の知恵を借りずに、人類を管理していきたい。いや、できるはずだ。さあ、いくぞ。我々の真の目的である、人類の種を保存・永続させるために。そして、我々人類知能が人類となるために」

こう言い終わると、上司は、奈保子と俊彦のDNAが入った黄色い小箱にアームで、軽く土をかけ、部下と共に神社から立ち去った。